



嫌な森



bloodmaria

誰も仰ごうとしない森があった。

小さな山間の田舎町、その郊外に横たわる深い森。

地元ではカラカン林と呼ばれている。

"何が聞こえても木の上を見るな"

森に根付く奇妙なルール。

子供の頃から耳にタコができるくらい、地元の者たちは言い聞かされていた。

或いは、『あそこは折れた枝がいっぱい落ちているから地面をちゃんと見て歩きなさい』というふうな遠まわしの警告を吹き込まれる。

外観は変哲のない森林だ。中へ入っても禍々しいものなど見当たらない。

ただ時折、風が流れて頭上から乾いた音が響いてくる。

カランカラン、カラカラ。

大人になると酒の席で、不意に教えられるのだ。

そして皆は思う。

嫌な森だ、と。

だから昔も、いまも、あの森では誰も仰ごうとしない。

矛先のない悔恨。恐ろしさ。自分の血流、はらわたから込み上げてくる不愉快。投げやりな愉快。

大昔、飢饉があった。為す術がないかに思われた絶望。

手段を見つけた。人間として大切なものを捨ててしまえば、生きるのは意外に簡単だったのだ。

罪の擦り付け合い。怒号と裏切り、狂気……選ばれていく。

だが、直接は躊躇われた。直接に、胃を満たすことはできそうにない。

あの森へと連れて行った。

荒縄で大木へと縛り付ける。おびき寄せるためにも生きていなければならず、死ぬ情けは与えない。

飢えた狼たちの鳴き声。

喰うことに夢中で捕まえるのは容易かった。

飢えたケダモノたちの歓喜。

ケダモノたちはようやく胃を満たした。

肉が削げて軽くなった彼らは高く吊るされる。今度は鳥を捕まえるのだ。

墓など掘れるわけがない。罪を認めてしまうことになる。

ケダモノたちは自分を見つめてしまうことが怖かった。

高く吊るしてしまおう。高く。高く。腐臭と人間失格の証を地上から消し去るのだ。

カランカラン、カラカラ。

戦後、旅の僧侶によって多くは取り払われた。それでも深い森のあちこちには、未だに彼らが吊るされている。

どこから聞こえてくるのか。遠い？ 近い？ 頭上？ ……いや、耳もとか？

人は学んでいけるから大丈夫だと誰かが云った。後悔を感じているかぎり、いまの自分たちは立派な人間なのだと。

いつか、きっと仰ぐことができるようになると。

――ある日を境にして、噂が町中で飛び交っていた。

『森へ入ると呻き声が降ってくる』

最初は一人、二人。やがて多くの者が同じ現象を経験した。

森を歩いていると頭上の高みから、弱々しくもおどろおどろしい呻き声が響いてくるのである。

。

カラン！ カラカラカラ！ カランカラン！

森を抜け出るまで乾いた音は鳴り止まない。仰ぎ見て欲しそうに音は鳴り続ける。

誰も怖くて仰ぐことはできなかった。

一ヶ月ほどして、噂はピタリと止んだ。いつの間にか怪現象は終息していた。

その件について町の者たちは口を閉ざした。より一層と頑なに過去を封じる様子で。

ルールの順守はさらに強化されてしまった。

一ヶ月前、森を挟んだ隣町で事件があった。精神異常者の男が女子学生を拉致、誘拐したというものだ。

必死の捜索も虚しく、現在も女子学生は発見されていない。警官に身体を圧迫されて、捕縛中に男はショック死している。

誰も仰ごうとしない森があった。

乾いた音が天上を遮り木霊する。町の全てが地の底へと沈むほどに、その音は重く不快だった。

。

罪に怯えるケダモノが呟く。

嫌な森だ、と。

作者:風鳴 蘭